

大阪工業大学工学部 学生員 ○東海林 剛
大阪工業大学工学部 正会員 岩崎 義一

1. 研究の背景と目的：安土・桃山時代は中央集権の封建制社会が成立した江戸時代に戦国期の社会を接続する特異な時代であった。都市造営においても山城から平城へと立地を変化させ都市が為政、文化、産業の舞台となった。特に秀吉は、都市造営において寺院を強制移転させ、寺町を造るなど宗教を巧みに活用した。そこで本研究では寺院の集積性に着目し、秀吉が関わった大阪と京都における寺院集積の変化について明らかにする。

2. 時代別、宗派別にみる寺院の集積タイプ：各時代別、宗派別における寺院数を秀吉が寺町を形成した中世末期より調べた。なお寺院数の少ない天台宗、真言宗などの宗派に関しては省略し、浄土宗、日蓮宗、禅宗(大阪のみ)、浄土真宗を調べた。中世末期と現代の寺院分布を図1、図2に示した。これによると、中世末期に存在していた寺院のほとんどは現代においても存在していることが分かる。こうした分布変化をたどった集積において、寺院集積がどのように変化してきたかについて、寺院間の最短間隔を用いて、実測値をランダム分布の理論モデル(ここでは、乱数による80個のデータを20cm×20cmのスペースに付置し、これをランダム分布の理論値としたものである)で変換することにより適合度検定で判定した。図3、図4は各年代の寺院集積の実測値と理論値を示し、図5はこれを総括したものである。

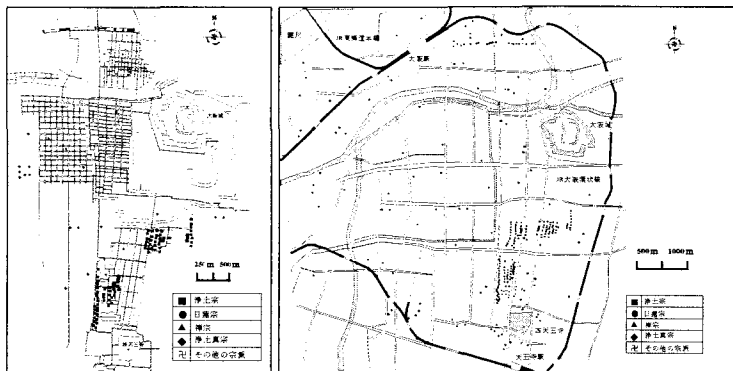


図1 大阪における寺院分布図(左：中世末期、右：現代)

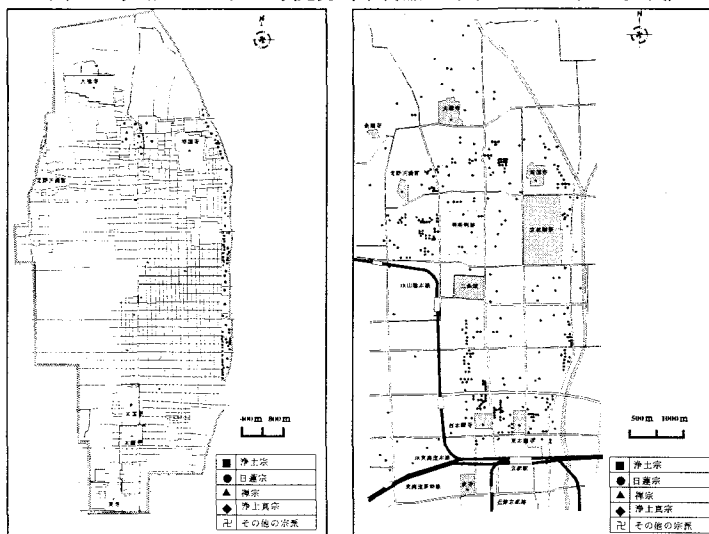


図2 京都における寺院分布図(左：中世末期、右：現代)

①大阪：浄土宗、日蓮宗は、現代に至る

まで集中型分布、禅宗は現代に至るまでランダム型分布となっており、各宗派が集落を形成するかのようにまとまって立地している。次に浄土真宗は明治に至るまで集中型分布となっており、船場に集中して寺院が立地している。しかし明治から現代にかけては集中型分布からランダム型分布に変化している。これは市中に寺院が存在していたものの、市街化の進行とともに移転するなど、拡散し減少したと考えられる。

②京都：浄土宗は現代に至るまで集中型分布となっており、日蓮宗は秀吉が寺院を強制移転する前(中世移転前)はランダム型分布で、強制移転させた後の中世末期から現代にかけては集中型分布になっている。次に浄土真宗は中世末期から明治にかけてはランダム型分布になっており西本願寺、東本願寺周辺に立地している。しかし明治から現代にかけては寺院の増加にともない、ランダム型分布から集中型分布に変化している。

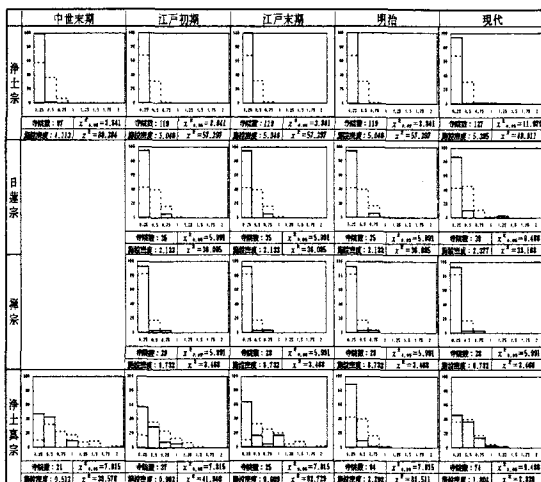


図3 大阪における宗派別・時代別、距離ランク度数分布

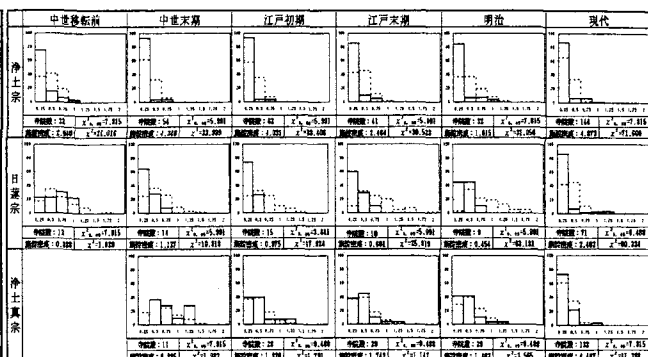


図4 京都における宗派別・時代別、距離ランク度数分布

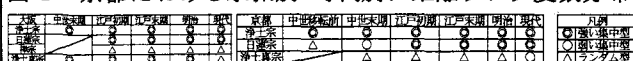


図5 大阪、京都における集積タイプ判定結果

3. 地域別、宗派別にみる寺院周辺の土地利用：前章では寺院集積をみたが、中世末期の寺院の集積に大きな変化は現在でもみられない。しかし寺院周辺は市街化が進行してきている訳であり、現在の寺院周辺土地利用の実態分析により、寺院集積があまり変化しないことの要因が導出できるのではないかと考え、主成分分析を試みた。寺院周辺の土地利用は浄土真宗では都市的な施設が多く浄土宗、日蓮宗、禅宗(大阪のみ)では寺や墓地などの宗教施設が多い(図6)。第1主成分では因子負荷量がすべてプラスとなっており、住居、事業用ビルの値が大きいことを考えると、都市的利用の面を中心に全体的に期待が大きい形になっているものと考えられる。また第2主成分では都市的土地利用を重視するか宗教的土地利用を重視するかいずれかの形となっている。これらの傾向は大阪、京都ともに共通している。また市街地内に早くから展開していた浄土真宗が都市的土地利用を示す第1軸で大きな値を示している点で符号する。次に、浄土宗など集積を現在に残している地区は、因子負荷量とサンプルスコアプロットとの関係から都市的土地利用よりも宗教的土地利用が強く存在していたことが考えられる。これらは図6で示した周辺土地利用と一致している。このことは中世末期以降から存在してきた寺町は都市発展において、市街化が進行しても宗教的性格が強く残す形で周辺土地利用が進み集積を維持してきたことが大きな要因であると思われる。

な変化は現在でもみられない。しかし寺院周辺は市街化が進行してきている訳であり、現在の寺院周辺土地利用の実態分析により、寺院集積があまり変化しないことの要因が導出できるのではないかと考え、主成分分析を試みた。寺院周辺の土地利用は浄土真宗では都市的な施設が多く浄土宗、日蓮宗、禅宗(大阪のみ)では寺や墓地などの宗教施設が多い(図6)。第1主成分では因子負荷量がすべてプラスとなっており、住居、事業用ビルの値が大きいことを考えると、都市的利用の面を中心に全体的に期待が大きい形になっているものと考えられる。また第2主成分では都市的土地利用を重視するか宗教的土地利用を重視するかいずれかの形となっている。これらの傾向は大阪、京都ともに共通している。また市街地内に早くから展開していた浄土真宗が都市的土地利用を示す第1軸で大きな値を示している点で符号する。次に、浄土宗など集積を現在に残している地区は、因子負荷量とサンプルスコアプロットとの関係から都市的土地利用よりも宗教的土地利用が強く存在していたことが考えられる。これらは図6で示した周辺土地利用と一致している。このことは中世末期以降から存在してきた寺町は都市発展において、市街化が進行しても宗教的性格が強く残す形で周辺土地利用が進み集積を維持してきたことが大きな要因であると思われる。

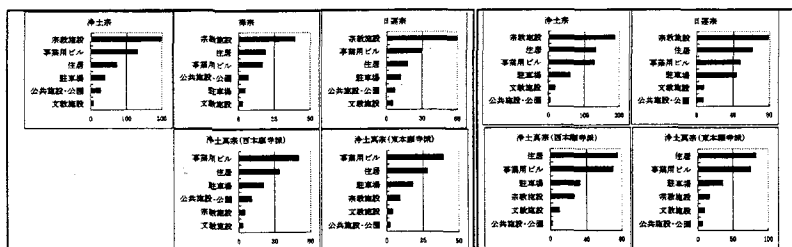


図6 宗派別の寺院周辺土地利用(左：大阪、右：京都)

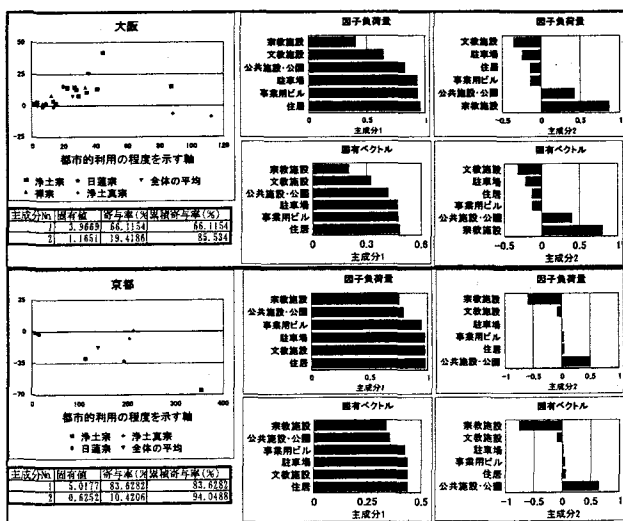


図7 主成分分析の結果

4. まとめ：本研究より得られた結果として、中世末期以降に作られた寺町は、現代に至るまで寺院数に大きな変化はなく、現代もなお寺町の形を残している。これは宗教的土地利用が強く働いてきたことが原因と考えられる。このことから浄土真宗を除く宗派は、為政者による移転などの強制力が働かない限り、寺の集積は簡単に変化するものではないと言えよう。